

ネット ワーク 通信

2012
No.52
秋号

社会広聴アンケート
「高齢社会に関する
アンケート」調査結果 1

企業と生活者懇談会 11
戸田建設(京都)
安川電機(埼玉)

ご意見・ご感想 19

経済広報センターニュース 21



「高齢社会に関するアンケート」調査結果

「現行の年金制度の抜本的な見直し」 「医療費・介護費の抑制」が上位2項目

現在、高齢期の長い間を自立的に暮らす人たちが増えています。アクティブな高齢者を、誰と、どこで、どのように暮らしていくかは、高齢者だけでなく、現役の世代にとっても早くから考えておくべき大切なテーマです。

本来、人間が長生きするという長寿社会の実現は誇るべきことです。しかし、高齢者が急激に増加し生産年齢人口が相対的に減少することは、日本に構造的に深刻な影響を与えます。社会保障制度をはじめ、社会経済システムの見直しが避けられません。

今回の調査結果からは、高齢期について多くの人々が、隠居、隠遁という旧来のイメージには当てはまらない、活動的な生活・暮らしぶりを志向していることが確認されました。

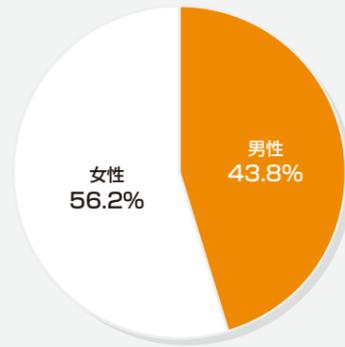
高齢社会の一層の進展には多くの人々が不安を感じ、「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」を危惧しています。対策としては「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」「医療費・介護費の抑制」を特に強く期待しています。その一方で、高齢期にも働きたいと回答した方は約6割にも上りました。そのうち6割強は少なくとも70歳ぐらいまでは働く意向を持っていました。高齢期に期待できることとしては、「趣味・娯楽に打ち込む」「豊富な自由時間を利用して、これまでできなかったことにトライする」というポジティブな項目が上位に挙がっています。

いくつかの調査項目では、世代間の意識の相違も確認されました。高齢社会の課題を検討・議論する際には、それぞれの世代が置かれた立場、視点の違いに十分留意する必要があると思われます。

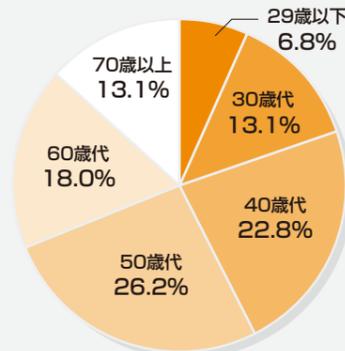
この調査では、回答者に対して、高齢期を「定年退職後、または定年がない場合は60歳以降に、おおむね自立して生活できている状況」と想定して回答することを求めた。
また、高齢期の暮らし方についての意向や見直しについての設問では、既に高齢期を迎えている回答者には、現在の考え・気持ちを回答することを求めた。

■回答者の属性

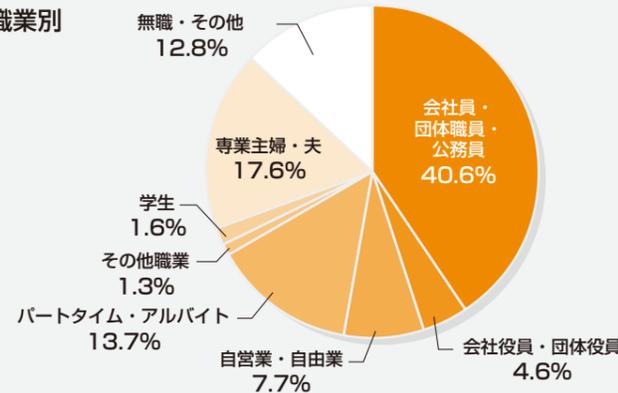
●性別



●世代別



●職業別



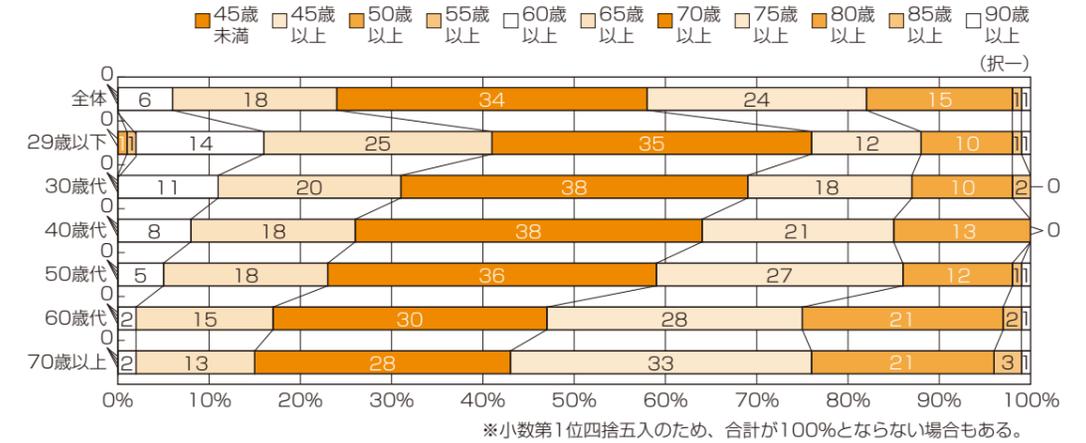
調査の概要

- (1) 調査名称：高齢社会に関するアンケート
- (2) 調査対象：eネット社会広聴会員3142人
- (3) 調査方法：インターネットによる回答選択方式および自由記述方式
- (4) 調査期間：2012年3月8日～3月19日
- (5) 有効回答：2015人（64.1%）

1 「高齢者」という言葉からイメージする年齢

●Point 「高齢者」という言葉のイメージは、「70歳以上の年齢層」が75%

全体・世代別

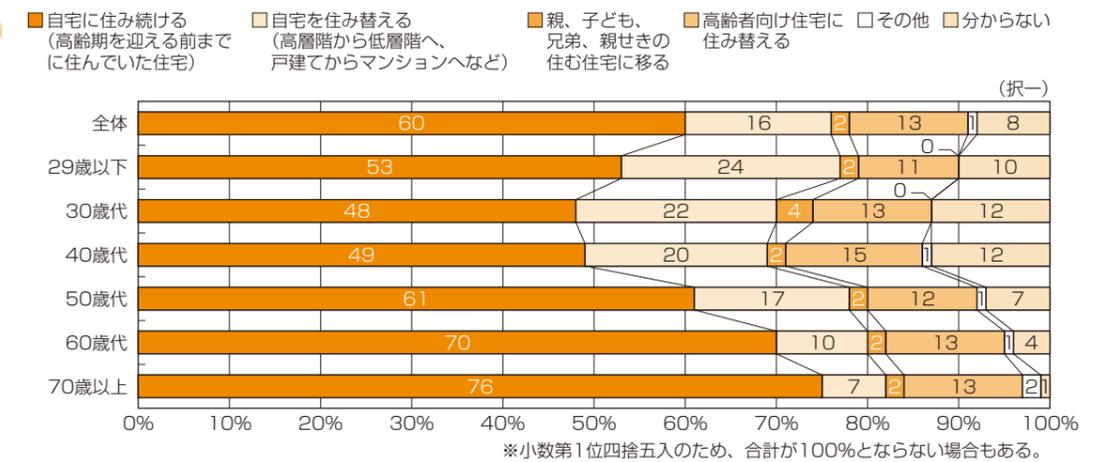


「高齢者」という言葉からイメージする年齢層を聞いたところ、最も回答が多かったのは「70歳以上」（34%）であり、「75歳以上」「80歳以上」など70歳以上の年齢層を答えた割合は75%に上る。あわせて、「老人」「シニア」という言葉からイメージする年齢層も聞いたが、それぞれについて最も回答が集まった年齢層は、「老人」が「70歳以上」（39%）、「シニア」が「60歳以上」（41%）である。

2 高齢期に暮らしたい住まい

●Point 6割は自宅に住み続け、3割は何らかの住み替えを希望

全体・世代別



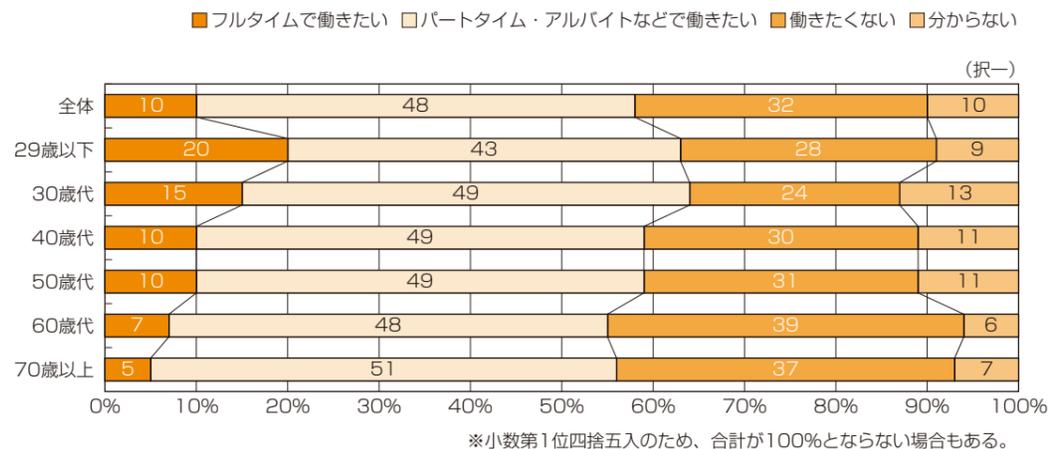
高齢期に主にどのような住まいで暮らしたいと思うかを聞いたところ、6割が「自宅に住み続ける（高齢期を迎える前までに住んでいた住宅）」と回答している。約3割は何らかの形で住み替えたいと考えており、「自宅を住み替える（高層階から低層階へ、戸建てからマンションへなど）」が16%、「高齢者向け住宅*に住み替える」が13%となっている。

*バリアフリーで、生活支援サービス（安否確認、生活相談など）を受けられる住まい。例えばケアハウス、シルバーハウジング（公営住宅）、サービス付き高齢者向け賃貸住宅、有料老人ホームなど。

3 高齢期に働く意向

● Point 男女や世代を通じて約6割が、高齢期も「働きたい」

全体・世代別

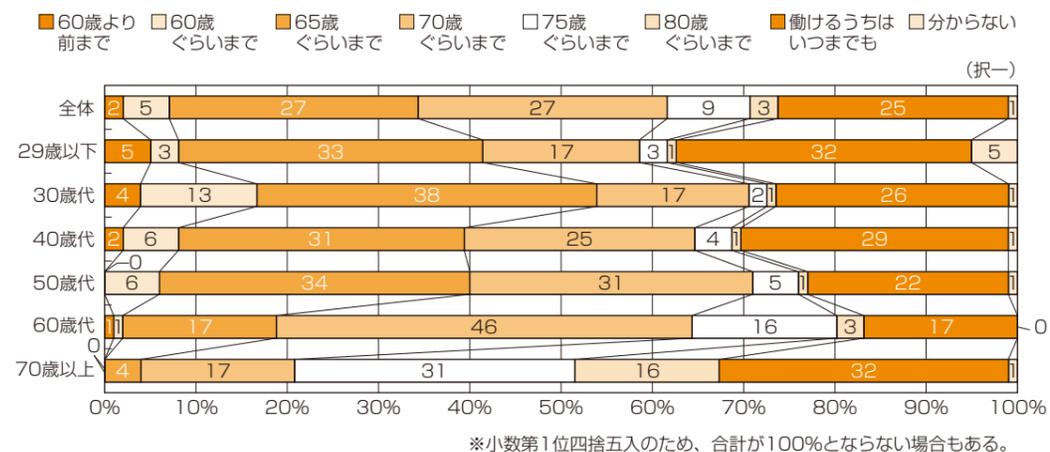


高齢期に働きたいと思うかを聞いたところ、「パートタイム・アルバイトなどで働きたい」(48%)が約半数を占め、「フルタイムで働きたい」(10%)と合わせて約6割は働きたいと回答している。

4 働き続けたい年齢

● Point 働く意向がある回答者のうち、「65歳ぐらいまで働きたい」「70歳ぐらいまで働きたい」が共に27%。4人に1人は「いつまでも働きたい」

全体・世代別

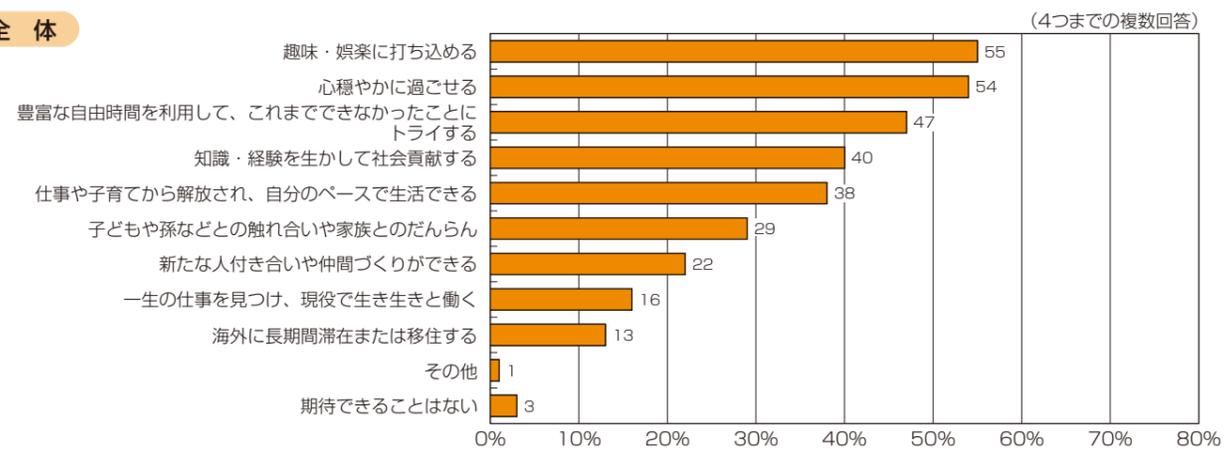


高齢期に働く意向がある回答者58%（「働きたい（フルタイムで／パートタイム・アルバイトなどで）」を対象に、何歳まで働きたいかを聞いたところ、「65歳ぐらいまで」「70歳ぐらいまで」が共に27%に上る。また、4人に1人は「働けるうちはいつまでも」と回答しており、6割強が少なくとも70歳までは働く意向がある。

5 高齢期の生活・暮らしについて期待できること

● Point 「趣味・娯楽に打ち込める」「心穏やかに過ごせる」が50%強で上位

全体

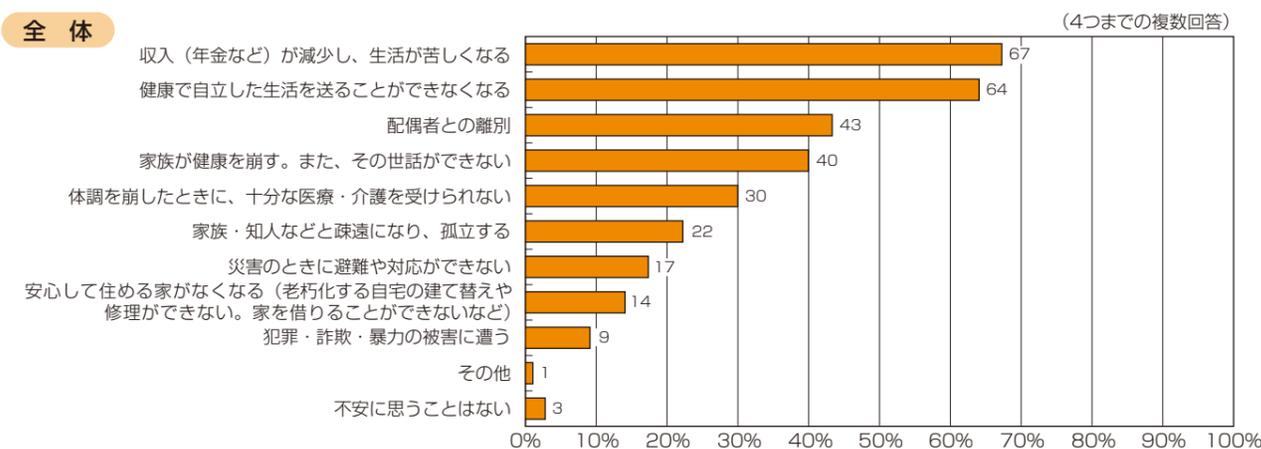


高齢期の生活・暮らしについて期待できることを聞いたところ、「趣味・娯楽に打ち込める」(55%)という活動的な項目と、「心穏やかに過ごせる」(54%)という項目が上位に並び、続いて「豊富な自由時間を利用して、これまでできなかったことにトライする」(47%)という意欲的な項目が挙げられている。多くの人が、隠居、隠遁といった旧来の高齢期の生活イメージに当てはまらない、アクティブな暮らしぶりを志向している。

6 高齢期の生活・暮らしについて不安に思うこと

● Point 若い世代は家計への不安、高齢世代は健康への不安が大きい

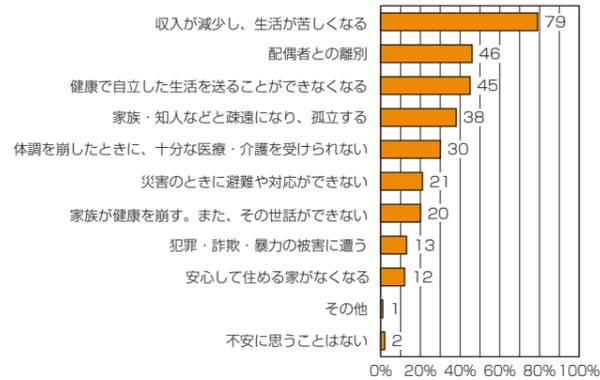
全体



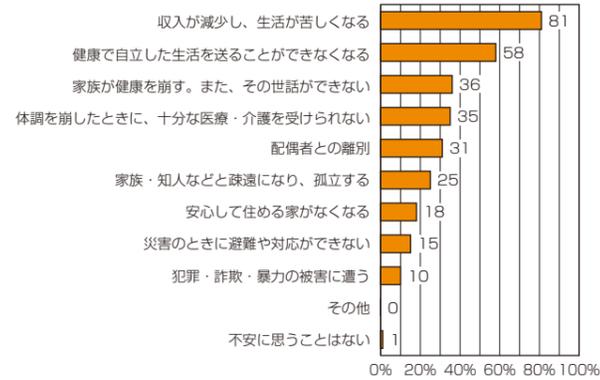
高齢期の生活・暮らしについて不安に思うことを聞いたところ、「収入(年金など)が減少し、生活が苦しくなる」が67%、「健康で自立した生活を送ることができなくなる」が64%と、家計と健康に関する不安が上位に並ぶ。

世代別

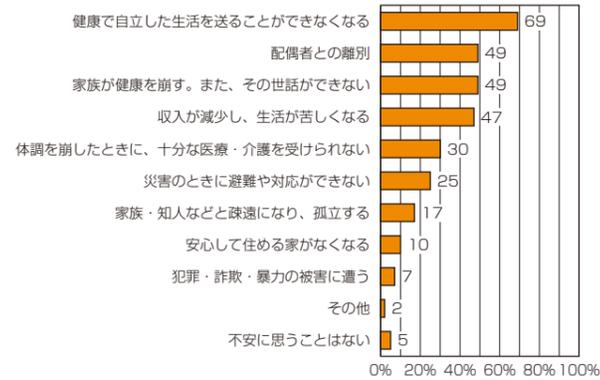
29歳以下



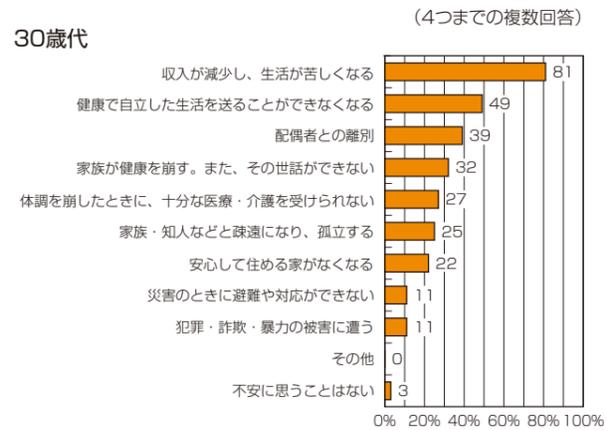
40歳代



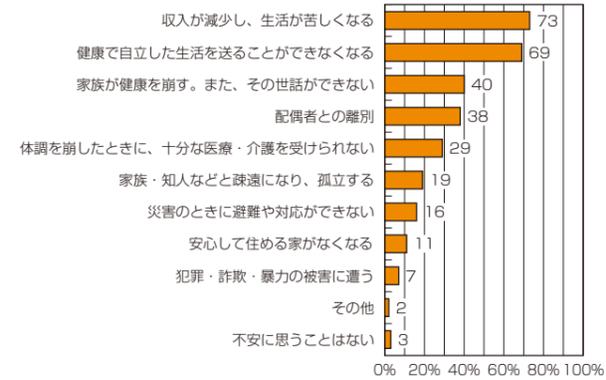
60歳代



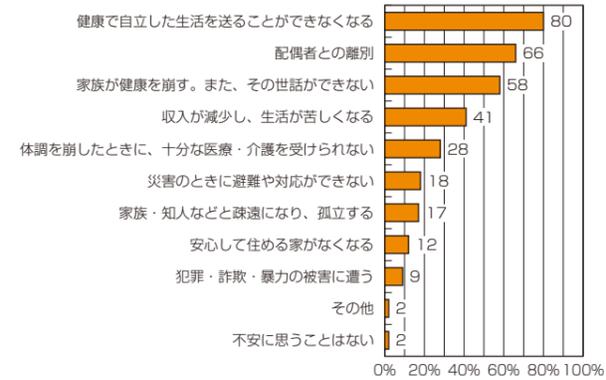
30歳代



50歳代



70歳以上



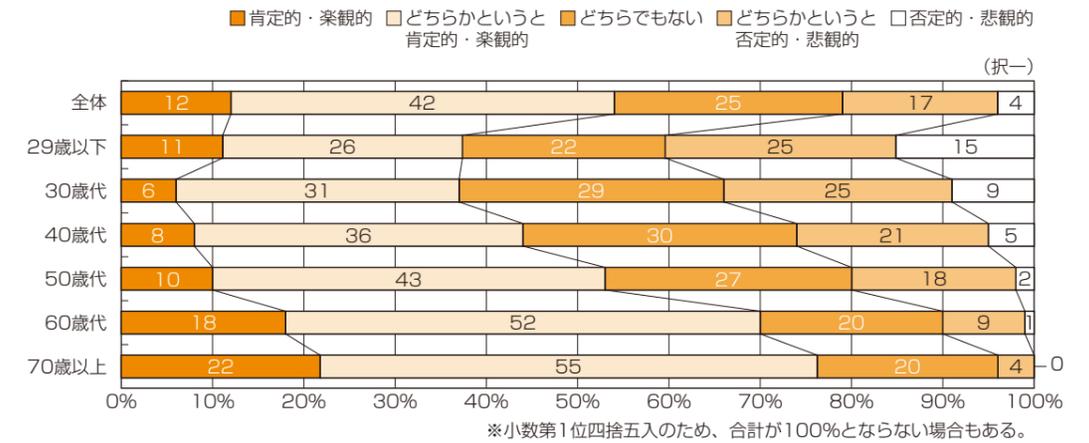
世代別で見ると、29歳以下、30歳代、40歳代では「収入が減少し、生活が苦しくなる」という家計への不安が約80%とほかの項目を引き離して高い。60歳代、70歳以上の高齢世代では家計への不安は後退し、代わりに「健康で自立した生活を送ることができなくなる」という健康不安がそれぞれ69%、80%と高く、最上位に挙げられている。

7

高齢期の生活・暮らしへの意識

Point 高齢世代ほど楽観的で、若い世代では楽観と悲観が均衡

全体・世代別



高齢期の生活・暮らしについて楽観的に考えているか、悲観的に考えているかを聞いたところ、「どちらかというとき肯定的・楽観的」が42%と最も多く、「肯定的・楽観的」12%と合わせて、半数以上が肯定的・楽観的である。4人に1人は「どちらでもない」と回答している。

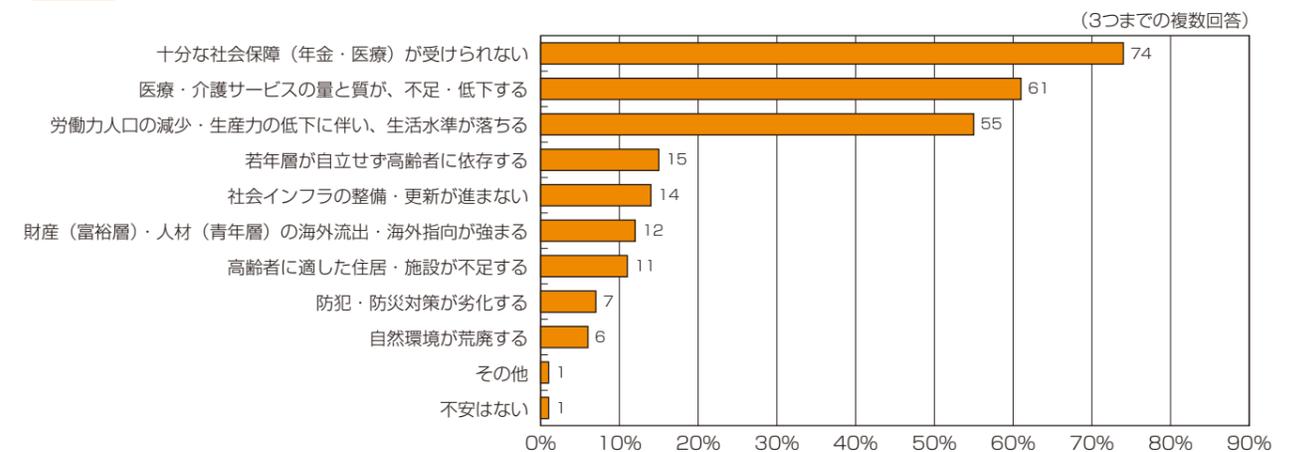
世代別で見ると、29歳以下では「肯定的・楽観的（肯定的・楽観的／どちらかというとき）」が37%で「否定的・悲観的（否定的・悲観的／どちらかというとき）」が40%とわずかに悲観派が上回る。楽観派の比率は回答者の世代が上がるにつれて高まる。この違いには、若い世代ほど高齢期を迎えるのが遠い将来で見通し難いことや、高齢世代ほど年相応の諦観を備え現状肯定的となることが影響していると思われる。

8

高齢社会の進展について不安に感じること

Point 「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」が上位3項目

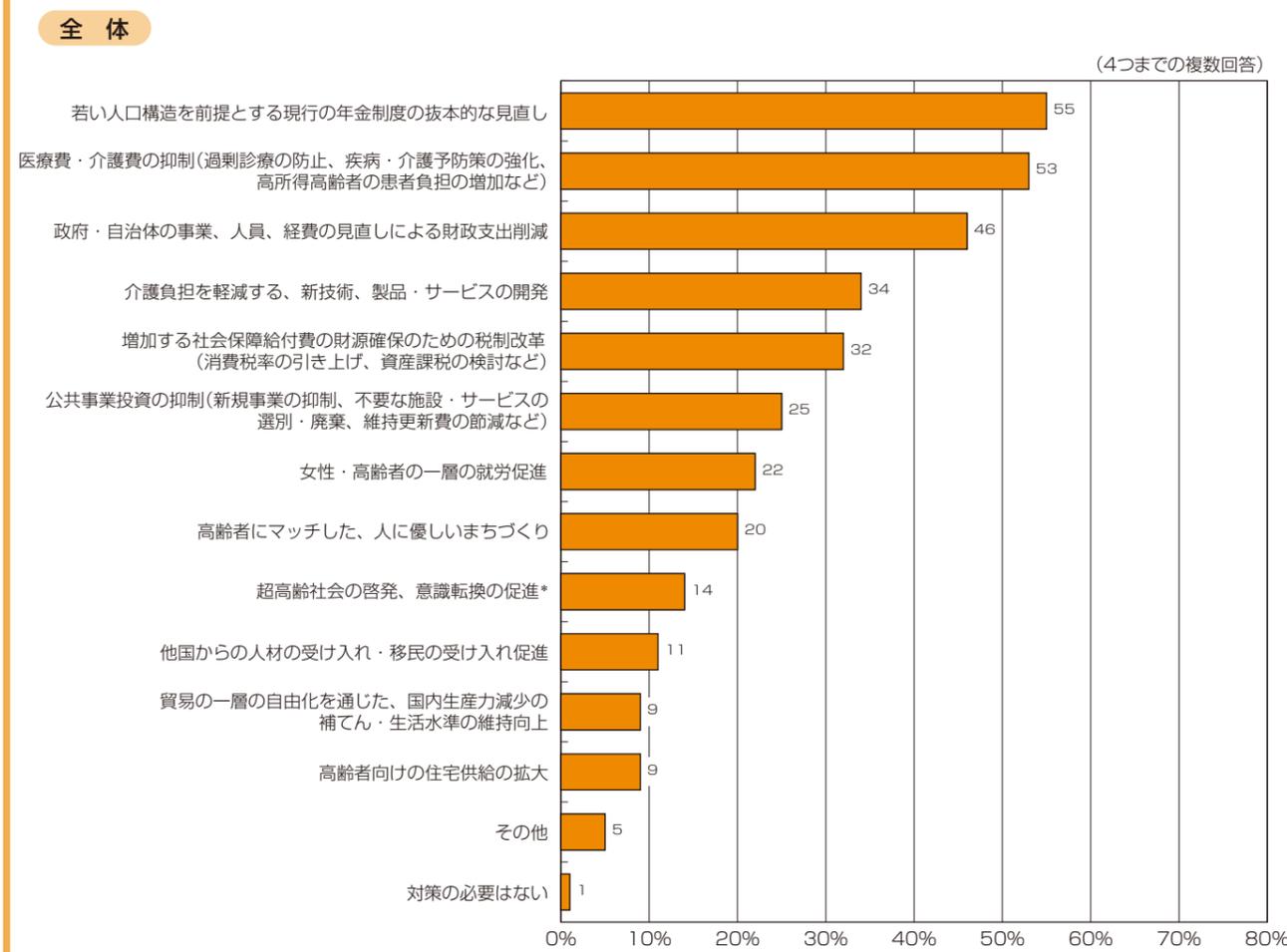
全体



高齢社会の進展について不安を感じる点を聞いたところ、「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」（74%）、「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」（61%）、「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」（55%）が上位3項目に挙げられている。「不安はない」との回答はわずか1%である。

9 高齢社会の進展に備え取るべき対策

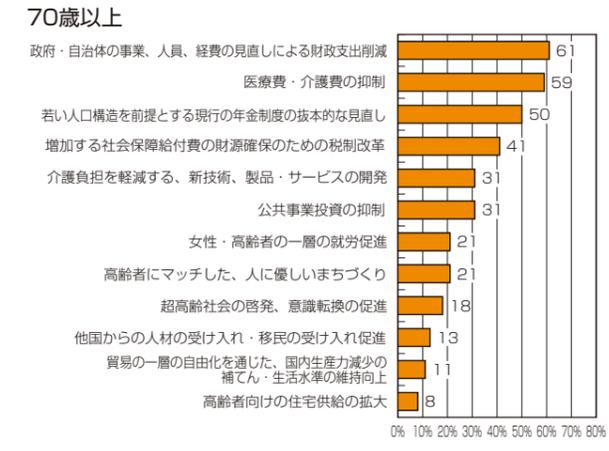
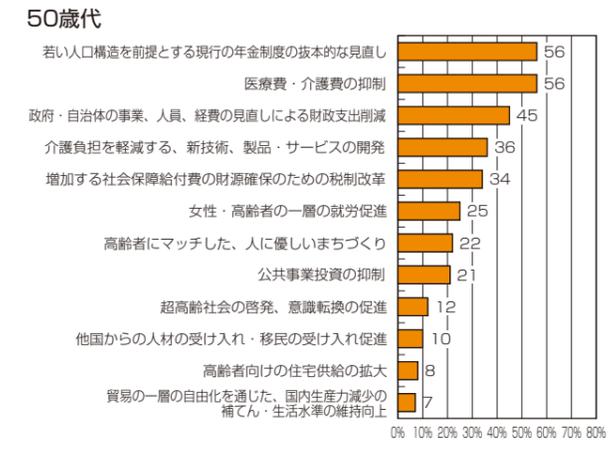
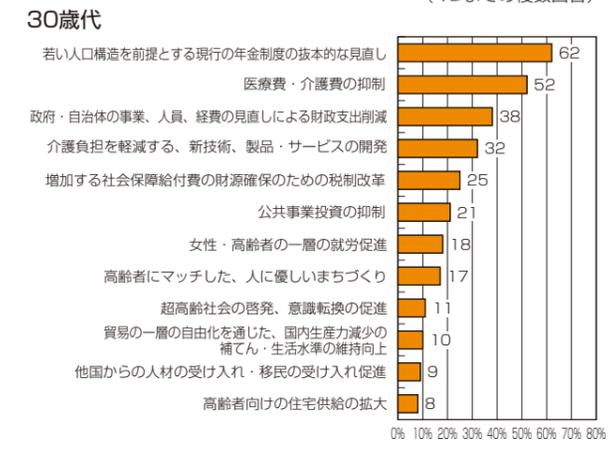
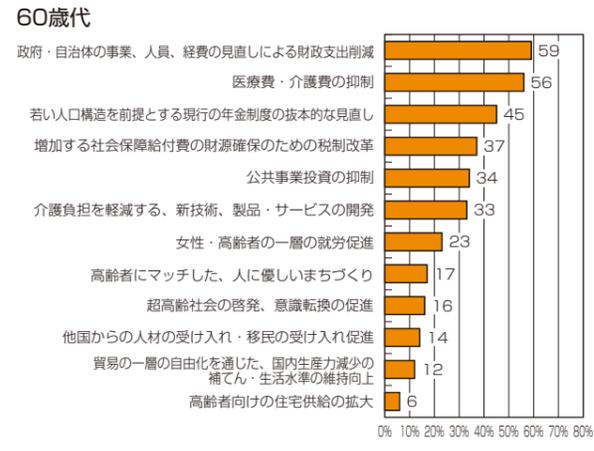
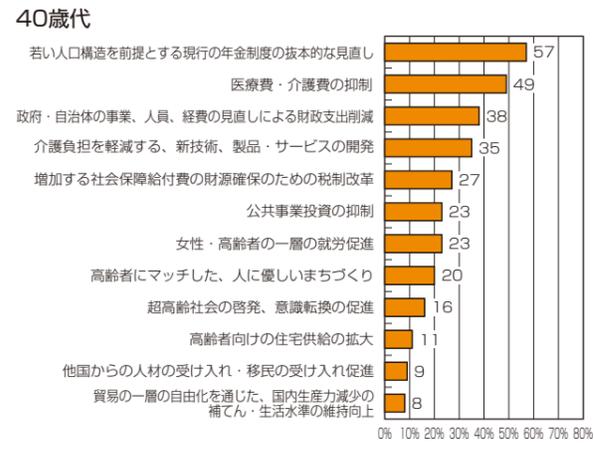
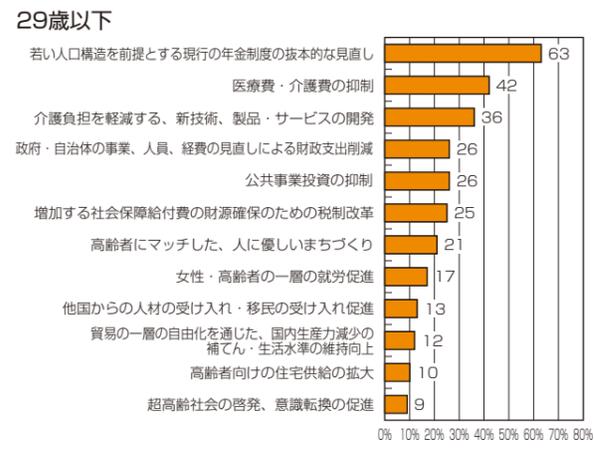
Point 「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」「医療費・介護費の抑制」が上位2項目



高齢社会の進展に備え取るべき対策を聞いたところ、「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」（55%）、「医療費・介護費の抑制（過剰診療の防止、疾病・介護予防策の強化、高所得高齢者の患者負担の増加など）」（53%）が5割強と高い。「政府・自治体の事業、人員、経費の見直しによる財政支出削減」（46%）は第3位に挙げられている。社会保障改革と組み合わせて議論されている「増加する社会保障給付費の財源確保のための税制改革（消費税率の引き上げ、資産課税の検討など）」は32%と、第5位に挙げられている。

* 長期人口推移予測の周知、GDP（国内総生産）を補う経済指標の開発・活用など（例：人口一人当たり数値の重視、GNH（国民総幸福量）に類する新指標の開発）

世代別



世代間で、順位に違いが見られる。全体で第1位の「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」は、29歳以下および30歳代の若い年齢層で、それぞれ63%、62%という高さで最上位となっている。より少ない人数で多くの受給者を支えることとなる若い世代には、年金制度の抜本的な見直しは切実かつ喫緊の課題と広く認識されているようだ。その一方、60歳代、70歳以上の高齢世代では、支持率は低くないものの第3位と後退している。60歳代、70歳以上の2世代を通じた第1位は、「政府・自治体の事業、人員、経費の見直しによる財政支出削減」である。なお、全体で第2位の「医療費・介護費の抑制」は、50歳代で第1位、そのほかのすべての世代において第2位と上位になっている。

高齢社会に関する意見・感想

29歳以下の意見・感想

- ◆親がそろそろ高齢期を迎えます。その姿を見て、自分も高齢期に関して具体的なイメージを持てるようになるのだと思います。今は正直、あまりピンときていません。
- ◆社会が変化していくと分かっているのに、何の対策も取られていないという感覚があります。自分が現在納めている年金もきちんと自分たちに還元されるか分からず、老後について考えるのが不安です。老後について考える以前にまず現在の自分たちが置かれている環境（雇用環境の悪化など）のことで、近い将来までの間をどのように過ごすかで、すでに精一杯です。
- ◆日本全体の社会の構造が変わっていくのに合わせて社会の仕組みを変えていく必要があると思います。年金の見直しといった直接的な問題だけでなく、雇用の在り方（男女・年齢を問わずに、働き方を選べ、結果として労働者を増やす）などのことも含めて検討していかなければならないと考えます。
- ◆私は高齢社会の到来には不安を抱いていません。高齢者が増えることによって、当事者（高齢者）意識の強い改革が進んでいくようになると思います。今大切なのは「不安を煽り立てる」ことではなく、問題を一人ひとりが自分のこととしてとらえ、「自分にできることは何か」を考えていくことだと思います。
- ◆現在の高齢者は年金や社会保障などにおいて優遇されており、高齢社会の進展により、若年層の負担は増すばかりです。既得権益に切り込むのは大きな困難を伴いますが、年金や医療費の削減などに抜本的な対策を取らないと、社会は荒廃し、高齢者を含めたすべての人々が不幸になるでしょう。

30歳代の意見・感想

- ◆2児の母です。育児に奮闘しています。自分のことより家族のことを優先する毎日です。子どもの育児を終えるころには、親の介護、親の暮らしの援助などが待ち構えています。高齢者があまり家族を頼らなくても、住み慣れたまちで自立して暮らせるようなサービスがあればと思います。
- ◆高齢者が増加するという話は、中学生のころから聞か

されていた気がします。今になっても抜本的な見直しができず、応急手当てのような現行システムの延命処置でつないできていたことに驚きを感じています。この調子だと自分が高齢者になったときの社会の仕組みにも期待できそうにないかな、などと思います。

- ◆高齢者の負担より、若年層の負担をより問題視すべきでしょう。これからは若者が支えていくのだから。
- ◆刻一刻と高齢化は進んでいるので、海外からの移民や働き手を積極的に受け入れることを考えていくべきだと思います。
- ◆右肩上がりの時代を支えてきた世代は、年金も潤沢で生活は安定していますが、私たちの世代は年金制度が機能しているのか、先行きが不透明で不安ばかりです。人口構成の前提も崩壊していると感じるので、少子化への対策を取るべきだと感じます。子どもを生みやすい環境づくり、不妊治療の助成などを希望します。

40歳代の意見・感想

- ◆「長生きするのが迷惑である」というとらえ方をせざるを得ない風潮があまりにも強いです。財政を抑制するばかりでなく、経済を発展させるといった、もっと前向きな政策に期待します。
- ◆医療・介護・年金などの制度に安心できないため、将来の生活に対して漠然とした不安を抱いています。消費税増税や番号制度の導入など、具体的な不安解消のための手立てを尽くす必要があります。
- ◆年金制度見直しは必要ですが、まず現在の受給者の年金額を引き下げるべきです。高齢者を支える若者にこそ、将来を大きく展望できるような制度が必要だと思います。
- ◆超高齢社会が不幸な社会なのかどうか、来てみないと分からないと思います。「お金」「健康」「生きがい」の3つ以外の備えは、それほど重要ではないと思います。

50歳代の意見・感想

- ◆現在55歳です。これまで社会通念に合わせて我慢していた部分があるので、定年以後の人生は世間体にと

らわれずに自由な生き方をしたいと思っています。同じようなことをたくらんでいる同年代は結構多いです。

- ◆病気や障がいのリスクが高まる時期に、元気でなくても、あるいは心身が不自由になっても、一人の人間として生きることができるイメージを持てる社会をつくる必要があります。そのための地道な基盤づくりが大切だと思います。
- ◆税制改革とともに、賃金や労働に対する改革が必要だと思います。同じ仕事は同じ賃金が基本であれば、本人の体力・環境に応じて働きやすく、高齢者を含め幅広い世代からの労働力確保・消費拡大が期待でき、社会の活性化につながると思います。
- ◆アンケートでは選択しませんでした。海外への移住もよいかと感じています。子どもには海外に出ることを勧めています。

60歳代の意見・感想

- ◆2030年に日本の高齢者数が今のカナダの総人口と同じになるなんて、びっくりです。どこから社会保障費をもってくるのか、もっと真剣に考えるべきだと思います。また、定年をやたらに延ばすのは反対です。65歳を超えると体が疲弊します。「年を取るのも楽じゃない」というような日本にはなってほしくありません。
- ◆要介護者でなくてもちょっと疲れたときなどに使える安価な支援サービスや、かゆい所に手が届く多様なサービス付き住宅の供給など、高齢者が喜んで財布のひもを緩めるようなサービスを提供して経済を活性化してはどうでしょう。
- ◆年金の抜本的改革（現役世代が高齢者を支えるという構造をやめる）を早急に行い、老後の生活不安を払拭することが必要だと思います。また、消費税引き上げにより財源を確保する必要があるとは思いますが、天下りの廃止、公務員給与の引き下げ、議員の定数削減などを行わなければ広く理解を得られないのではないのでしょうか。
- ◆医療でいつまでも長生きさせ、結果莫大な医療費補助

が税金から出ているのは、これからの超高齢社会では成り立たないのでは。高齢者医療の在り方を皆で考えるべきだと思います。

- ◆「住み慣れた家で逝きたい」と願うのは無理からぬ話ですが、家族の負担、訪問看護、終末期介護の時間的・経済的なことを考えると、他人の介添えもできる元気なうちから、グループホームなどで相互扶助しながら余生を送る方が、本人にとっても安心・気楽なのではないかと思っています。NPOによる、改築した古民家を利用したグループホーム一歩手前のような活動に接することもあります。高齢者の生活拠点について多角的に検討するべきではないでしょうか。

70歳以上の意見・感想

- ◆今の高齢者は元気そのものです。動かしてもらえるところがあれば喜んで社会参加し、それが生きがいとなるので健康にも注意できるのだと思います。私も70歳を過ぎましたが、まだまだ社会のお役には立てていると自負しています。高齢社会は現実ですが、親しめない言葉ですね。
- ◆病院・施設ではなく在宅での介護が志向されていますが、老々介護や一家の働き手への負担増となり家庭崩壊も危惧されるので、やはり特別養護老人ホームの充実が必要だと思います。それにより介護職の雇用も増加します。介護付き有料老人ホームは料金が高いので多くの人にとって入居が難しいのでは。
- ◆行政は介護保険制度より先に、高齢者の自立的な生活をサポートするための食生活・運動の指導や健康診断などの予防医学的なことを推進すべきではないかと思っています。
- ◆2年前からグループホームのケアマネージャーとして週2日勤務し、それなりの収入も得ています。老人大学に行ったことで、仲間もたくさん増え、趣味の習字・短歌・ボランティアと毎日毎日充実した日々を送っています。健康ならいつまでも働ける社会であってほしいと願っています。それにつけても資格は大事ななあとも痛感しております。管理栄養士として、後進のために役職をいただいて頑張っています。

(文責 主任研究員 小寺隆夫)

企業と生活者懇談会

第170回【京都 2012年5月11日】

戸田建設株式会社 京都国立博物館平常展示館建築工事作業所

想いを、つなぐ。戸田建設のものづくり

5月11日、戸田建設が施工中の京都国立博物館平常展示館の建築工事作業所（京都市東山区）で、「企業と生活者懇談会」を開催し、社会広聴会員22名が参加しました。同社および建築工事の概要について説明を受けた後、施工現場を見学。午後は、京都国立博物館総務課の北條敦子環境整備係長による平常展示館建築工事プロジェクトに関する特別講演の後、質疑懇談を行いました。

戸田建設からは、岡敏朗取締役、川原道雄大阪支店支店次長、加藤文夫CSR推進室長、澁谷由規広報部長、伊奈一彦大阪支店総務部長、砥石彰大阪支店京滋建築総合営業所長、半田雅俊技術企画部企画課長、金本忠士大阪支店建築工事部工事長、曾我正志大阪支店京都国立博物館平常展示館建築工事作業所長が出席しました。

● 戸田建設からの説明

戸田建設の概要

戸田建設は、建築工事、土木工事、不動産事業を主たる事業とする総合建設業者です。従業員は4000名強、資本金約230億円、2011年度（平成23年度）の売り上げは4200億円強の事業規模で、日本の総合建設業者として上位から6番目に挙げられます。1881年（明治14年）の創業以来、早稲田大学大隈講堂、愛知県庁舎、大阪万博スイス館など、全国各地で時代を代表する建物の施工を手掛けてきました。

本社は東京都中央区にありますが、創業者の戸田利兵衛は京都の出身です。非常に縁の深い当地でも、近年数多くの実績を積み重ねており、現在は同志社大学今出川キャンパス良心館を建設中です。最近の工事実

績として広く注目を集めたのが戸田ビルディング青山です。壁面の透過型太陽光パネルや地中熱利用など50種類の環境技術を導入して環境性能を追求した中規模ビルです。通常のビルに比べ40%以上のCO₂（二酸化炭素）削減を実現しました。



岡取締役から歓迎のごあいさつ

京都国立博物館平常展示館建築工事について

1995年（平成7年）に京都国立博物館は、老朽化した旧平常展示館、陳列館および講堂ならびに事務庁舎を建て替えて、一体化した「平常展示館（仮称）」の建設を決定しました。設計は著名な建築家である谷口吉生先生率いる谷口建築設計研究所が担当し、建築工事は戸田建設が請け負っています。

新平常展示館は、地上4階地下2階の鉄骨鉄筋コンクリート構造で大きく3つのエリアから構成されます。1つは窓がない展示部分。次に大型ガラスが連続する明るいエントランスロビー。そして学芸員などの執務環境となる管理棟です。2009年（平成21年）3月に着工し、約4年後の来年2013年3月の竣工予定です。博物館による準備を経て2014年春にオープン予定です。

今回の工事は国家プロジェクト。全員が特別な仕事を担うことへの強い想いと自負を持っています。目標は2つ。1つは、戸田建設、協力会社、さらに施工に直接携わる作業員の持つすべての技術を結集し100年残る建物をつくること。もう1つは無事故無災害で竣工すること。この2つは事業主の京都国立博物館をはじめ、発注者の国土交通省、設計者の谷口先生などプロジェクトにかかわるみんなの想いでもあります。最

前線の私たちは、みんなの想いを受けとめて「手間を惜しむな」を合言葉に日々施工にいそしんでいます。



新平常展示館完成イメージ（左手の四角い建物）
資料提供：谷口建築設計研究所

文化財を守る建築技術

文化財を守るための様々な建築技術を採用しました。展示室と収蔵庫には床免震装置を採用します。建物全体を免震構造とする技術もありますが、地下に免震装置と建物の揺れ幅分のさらなるスペースが必要となります。歴史ある土地への余分な掘削を避けるため、床免震技術で対応することとしました。

博物館は風致地域内にあり建物の高さが15メートル以内に制限されます。このため収蔵庫は地下に設けられますが、敷地は東山から鴨川へと流れる地下水脈の上にあり漏水防止は最重要課題です。まず地下階部分の掘削工事で高い遮水性を持つ山留め壁面を設け、さらにこの壁面に防水材料を吹き付けて防水層をつくりました（先やり防水）。その上で地下躯体コンクリート工事に着手。このコンクリートの漏水対策も徹底しました。通常工法では型枠保持用のセパレータが工事後もコンクリート内部に残りますが、漏水の原因となりにかねないので、利用しない工法（ノンセパレータ工法）を採用しています。

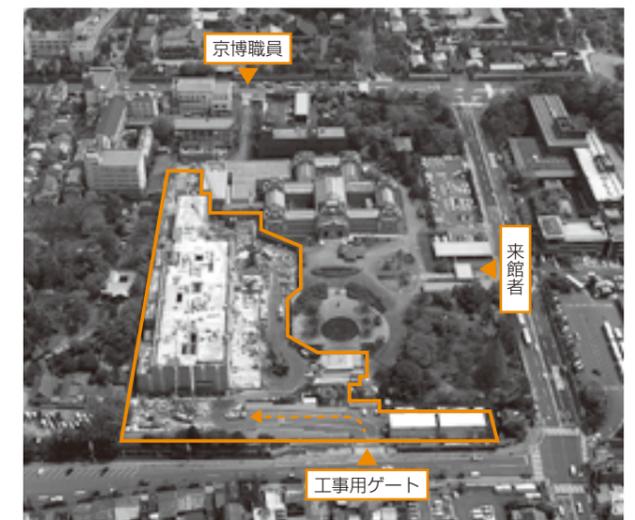
古都での工事

現場一帯は、豊臣秀吉が建立した方広寺の跡地です。工事前の調査で平常展示館南面のエントランスアプローチの直下から新たな遺構が発掘されました。工事中はもとより将来の改修作業などからも確実に保護するため、文化庁との協議の上、鉄板で養生しました。

博物館には重要文化財指定のレンガ造りの本館があり、新平常展示館の工事期間中も特別展を開催します。来館者の安全確保のため、資材搬入など工事現場へのアプローチは敷地西側に限られます。しかしそこには

旧本館と同時に重要文化財に指定されたレンガ造りの正門や、史跡方広寺石畳があります。工事に先立ち、正門には防塵の仮囲いを施しました。石畳については、地盤を痛めない盛り土によるスロープを設置することで保護しつつ、工事現場へのアプローチを確保しました。隣接する三十三間堂などを訪れる観光客や近隣学園に通う生徒の安全のため、七条通と東大路通の工事車両の通行は控えています。工事は4年にもわたりますので、仮設の工事事務所も景観に調和したデザインとし、京都市役所の許可を得た上で建てました。

古都ならではの様々な配慮が求められる現場ですが、この経験が戸田建設の財産になります。京都で工事する際に必要なノウハウをしっかりと引き継いでいくのも、この現場に携わる者の大切な仕事のひとつです。



枠内が建設現場（戸田建設資料より）

● 見学の様子

建設中の新平常展示館は、コンクリート躯体の基本構造はほぼ完成しており、今は来年3月の竣工に向けて、内装や仕上げの工事が進められています。

場内では、最初に「ユレキテル」という地震警報装置の紹介がありました。気象庁の緊急地震速報を受けると、パトランプとサイレンが地震の発生を工事現場に伝え、作業員は直ちに安全動作に入ります。

エントランスホールから建物内部へ。完成後はこのホールから庭園、さらに三十三間堂まできれいに見通せるそうです。続いて1階展示室を進みます。天井が高い右手北側には、仏像、彫刻が展示される予定です。

展示フロアのほぼ中央から伸びている階段は、巡回して様々な展示物を鑑賞する来館者に適した動線となるそうです。完成後の新平常展示館からの眺望や設計の狙いまでを交えた丁寧な説明を受けて、参加者一同、オープンが一層待ち遠しくなりました。



建設中の新平常展示館正面で説明を受ける参加者の皆さん

● 特別講演 「平常展示館建て替え工事について」 京都国立博物館 北條敦子環境整備係長

京都国立博物館は、1897年（明治30年）5月の開館以来、貴重な文化財の保管と展示、調査研究という重要な使命を果たしています。貴重な文化財約1万2000件を収蔵・保管し、うち110件は国宝です。展示だけでなく、伝統文化の普及活動や海外研究者との交流など多彩な活動を進めています。レンガ造りの特別展示館（旧本館）は、開館時以来の歴史的な建造物で、重要文化財に指定されています。先ほどご覧いただいた工事現場には、1966年（昭和41年）にオープンの新館（旧平常展示館）が建っていました。今日の利用形態・ニーズに照らして使い勝手が劣り、耐震性能も不足していたため、1995年に開館100周年事業の一環として建て替えを決定しました。1999年（平成11年）には設計も完了していましたが、京都市美観風致審議会の景観専門小委員会に諮られたところ、レンガ造りの本館とは対照的な寡黙なデザインに厳しい意見があり、修正に向けた協議が始まりました。建物の長大感を解消するなどの設計変更が施され、ようやく2007年（平成19年）に内部を含めたすべての設計がまとまり着工に至りました。

このような大事業では、関係者は数多くそれぞれの

立場や要求も様々です。事業主は博物館ですが、発注・監理は国土交通省です。博物館の中でも学芸員は作品の保存・展示を第一に建物を考えます。一方、管理部門としては維持管理のしやすさなどが優先事項です。設計者にとっては、博物館自体が100年間展示され続ける自分自身の作品ですから設計には強いこだわりがあります。「素晴らしい博物館をつくる」という想いを共にしながら、今もなお大いに議論を戦わせているところです。

● 懇談会の概要

Q 経営理念、ものづくりの姿勢を教えてください。

A 「人がつくる。人でつくる」。これが戸田建設のブランドメッセージです。

技術や機械を駆使して工事を進めますが、結局、その機械、技術を使うのは人間です。そして建物は図面だけあればつくれるものではありません。図面に込められている発注者の想い、設計者の想いを、コミュニケーションを取り合ってつくり込んでゆく。たくさんの想いがつながって初めて真に価値あるものは生まれます。人と人とのつながりで建物をつくるのが、戸田建設のものづくりの姿勢です。

Q 採用している建築技術をさらに教えてください。

A コンクリート躯体から放散されるアルカリ成分を短期間に除去する当社独自の技術を採用しています。コンクリートから放散されるアルカリガスは収蔵物の色を変化させてしまう恐れがあります。これを防ぐためコンクリート表面に特殊な水の散水と乾燥を繰り返すことで、アルカリ分を強制的に吐き出させます。竣工時までにはさらに低減されます。

旧平常展示館の解体に際しては、NEOカッター工法を採用しました。コンクリートをたたいて壊すのではなくて切って壊していく技術です。騒音と振動を抑えることができます。

Q 博物館の施工ということで特に留意している点は。

A 建築現場は埃が出ます。設置したダクトの中に埃が積もっていて、運用開始時にその埃が空調の風

と一緒に吹き出してくるようでは困ります。また、コンクリート面の間の隙間には粉塵がたまりまので、しっかり拭き取っておく必要があります。床免震の下の床部も防塵塗装で仕上げますが、最後にふたをする前にもう一度掃除をする予定です。これからも手間を惜しまずコツコツと、博物館に要求される環境性能を実現していきます。

Q 東日本大震災にどのように対応しましたか。

A 地震発生後ただちに、社長を本部長とする災害対策統括本部を本社に設置。夕方には第1回の対策会議を関係5支店とテレビ会議システムにより開催しました。東北支店はインターネットが不通のため衛星電話を使って参加しました。

東北支店では、震災2日後の10時には社員全員の無事を確認。約1カ月後の4月12日までには1072件のお客さまの施設の被災状況の確認を終え、うち671件につき応急・復旧作業を済ませています。

復旧・復興に向けた活動として、震災翌日の12日には警察の許可を取った上で救護物資輸送の第1便を送り出しました。東北に向けては、本社・他支店から約70名の支援要員を派遣しました。3月30日には復興対策室も設置し本格的な復旧工事に向けた取り組みを開始しました。

Q 日本の建物の環境技術の水準を教えてください。

A 世界中の建設会社がエネルギー消費ゼロの建物を目指して研究を進めています。ヨーロッパが先進しており、アジアではシンガポールが積極的に取り組んでいます。日本が一番ということではありません。

Q ガラスを多く使うビルに、防災上の不安はないのでしょうか。

A ガラスの建物への取り付け方によって変わります。ガラスが建物にがっちり固定されているような構造の場合、地震が起きて建物が変形すると、ガラスはそのゆがみに追従できずに割れてしまいます。一方、最近建てられた高層ビルには外壁一面がガラスのものがああります。それらは建物の骨格である鉄骨や梁に、ガラスのユニットがぶら下

げられているような構造です。ユニットは建物とは別に動けるため、ガラスには無理な力がかからず安全です。



参加者からの質問に答える曾我作業所長

● 参加者からの感想

▶ 遺跡や周辺環境への配慮など古都ならではの制約の多い中、クリアするための技術を練り上げ工事を進めていく姿勢に、建設会社としての誇りを感じました。

▶ 戸田建設の今回の工事に懸ける想いと情熱を強く感じました。京都国立博物館の方のご講演もあり、新平常展示館オープンの期待が一層高まりました。

▶ 京都での工事ならではの苦労と工夫がよく分かりました。建物をつくるということの社会的使命の大きさを改めて考えさせられた一日でした。

▶ 戸田建設が、環境保全や省エネルギーなど多様な観点から建築をとらえ様々な工夫をしていることは素晴らしいと思いました。大きなビルも、機械などは使われていても実際には人がつくっていることを再確認しました。



● 戸田建設 ご担当者より ●

ご参加いただいた社会広聴会員の皆さまには、仮囲いの中という普段見慣れない工事現場の中を見学いただきありがとうございました。皆さまから貴重なご意見をいただき、私どもにとっても良い勉強になりました。また励ましのお言葉をいただき大変感激しております。地震対策や震災復興など建設業が果たすべき役割は大きく、今後も皆さま方のお声をお聞きしながら、事業活動に生かしていきたいと考えています。

(文責 主任研究員 小寺隆夫)

株式会社安川電機 関東ロボットセンタ

来て・見て・触って ロボット体験

—産業と暮らしを支えるメカトロニクスを学ぶ

6月14日、安川電機の関東ロボットセンタで、「企業と生活者懇談会」を開催し、社会広聴会員21名が参加しました。同社および関東ロボットセンタの概要について説明を受けた後、関東ロボットセンタを見学。その後、最新のロボット技術やその将来性、同社の経営方針について説明を受け、続いて質疑懇談を行いました。

安川電機のロボット事業部東部営業部から、尾崎博販売業務課長兼関東ロボットセンタ副センタ長、永井俊明営業技術課長、販売業務課業務担当 淵本由紀氏、東京管理部から林田歩広報・IRグループ長、翠川宣之総務グループ長、総務グループ総務担当加藤大喜氏が出席しました。

● 安川電機からの説明

安川電機の概要

安川電機は、1915年（大正4年）の創立で、2015年に創立100周年を迎える長い歴史を持つ企業です。創業当初は炭鉱用電動機（モータ）を製造していました。その後オートメーション、さらにメカトロニクスへと新しい技術分野を開拓しながら、日本の主力産業・先端産業を支え続けてきました。本社は北九州市八幡西区です。従業員数は臨時社員も含めて1万4305人、連結売上高は3071億円（2011年度）です。

4つの事業

現在、大きく分けて4つの事業を展開しています。1つがサーボモータとインバータを製造・販売するモーションコントロール事業です。サーボモータは、当社の製品であるロボットの中だけでなく、半導体・液晶製造装置、工作機械など様々な製造装置の中で使われています。インバータとは、モータの回転数を自由に制御する装置で、産業機械の省エネ・小型化を

現します。各種産業機械や業務用のエアコン、エレベータなどに用いられています。

2つ目がロボット事業です。ロボットは元来、油圧や空圧で動くものでした。安川電機はモーションコントロールで培った自社技術を生かした全電動式のロボットの開発を目指し、1977年（昭和52年）に日本初の全電気式産業用ロボットの第一号機「MOTOMAN（モートマン）」を製造しました。以来、生産現場の様々な作業を自動化するロボットの開発を続け、国内外の産業用ロボット市場をリードし、厳しい作業環境や単調な作業から人間を解放することに貢献してきました。

メカトロニクスという言葉は安川電機が1960年代に考案しました。メカニズム（機械工学）とエレクトロニクス（電子工学）の融合技術分野を意味します。ロボット事業への進出は、メカトロニクスを象徴する取り組みでもありました。



安川電機の産業用ロボット（安川電機資料より）

3つ目は、システムエンジニアリング事業です。上下水道の水処理プラント、製鉄所のプラントなどで用いられる制御装置を開発・提供します。現在国内で稼働中のすべての高炉で当社の制御技術が採用されています。4つ目は情報部門で、当社のグループ会社で進めています。

産業用ロボット、ACサーボ*1およびインバータの3つの製品分野で、当社は世界シェアナンバーワンの地位を築いています。売上高を製品別に見ると、モーションコントロール事業が53%と約半分を占めます。また地域別では、売り上げの約半分は海外で、アジア

*1 交流電流（AC）で回転するサーボモータ。サーボとは追従機能のこと。サーボモータは、始動、停止、逆回転など、コントローラの指令どおりに動くモータである。

とりわけ中国向けが拡大しています。

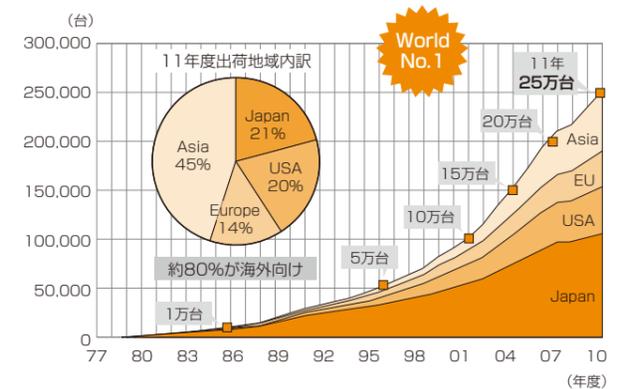
ロボット事業

ロボット事業の主要顧客は自動車メーカーです。溶接ロボットや、塗装ロボットなどを納めています。

最近では、物流におけるハンドリング、パッキングといった作業を自動化するロボットや、液晶ガラス・パネルを搬送するロボットを開発・販売することにより、機械、電機、物流、食品など様々な産業に顧客を広げています。

これからは人間のように、組み立てなどの複数かつ複雑な作業をするロボットの需要が増えてくると考えています。こうした需要に応えるのが、新世代双腕ロボットです。片腕に7つの軸、すなわちモータが内蔵されています。この「7」とは人間の腕の関節の可動域の数と同じで、人間に近いスムーズで細かい動きができるのが特長です。

2011年度（平成23年度）までの累計出荷台数は約25万台と世界一です。また出荷の80%は海外向けです。世界の舞台で当社のロボットは活躍しています。



ロボット累計出荷台数（安川電機資料より）

関東ロボットセンタ

関東ロボットセンタは「来て・見て・触ってロボット体験」をコンセプトに、昨年（2011年）11月にオープンしました。産業用ロボットの導入を検討しているお客さまに、実機によるデモやテストを通じて仕様や動作への理解を深めていただいたり、ロボットの新しい活用方法を共に検討しご提案するための施設です。

ロボットを導入したお客さまの教育施設も備えています。ロボットのティーチング作業（ロボットにプログラミングなどを通じて作業を教え込むこと）をする

には、労働安全規則に定められた教育を受ける必要があり、ここでその教育を行い修了証を発行しています。

● 見学の様子



ルービックキューブを器用に完成させる新世代双腕ロボット

1階受付の近くは主要製品のショールームです。最も人目を引くのは、スカーフを巻いた新世代双腕ロボット。これは見学者がバラバラにしたルービックキューブの面合わせを行うようにプログラムされています。両腕を上手に動かして、45秒ほどで完成させてしまいました。キューブの色は、可愛らしい“目”ではなく、台の下にあるセンサーで把握しているそうです。

次に、メイン施設であるCSプラザに移動し、様々な産業用ロボット製品が動く様子を目の当たりにしました。どれも個性的で、ロボットの仕事の広がりや驚かされます。例えば、段ボール箱を組み立てて最後にガムテープでふたをする双腕ロボット。閉梱という作業は単腕ロボットでは難しいそうです。

ロボットというと硬いものしか扱えないイメージがありますが、特殊な紙でできたハンドで泡状のムースを上手にすくい、別の場所に移すロボットもありました。お菓子や食品の生産現場で使われているそうです。

レーザーを使った3Dビジョンセンサーによって、山積みの部品一つひとつの高さや傾きを把握して、取りやすさを判断して順番に1つの場所に集めていくロボットも印象的です。センサーを搭載すると、決められた部品が決められた場所になくとも作業を進めることができるそうです。センサー技術がロボットの可能性を広げることを学びました。

屋上では、太陽光発電装置用のパワーコンディショナ、駐車場ではEV用急速充電器と、今後安川電機が注力していく環境・エネルギー関連の製品を見ることもできました。

●懇談会の概要

Q 今後の戦略を教えてください。

A 創立100周年に向けた2015年ビジョンとして、2つの事業領域の開拓を進めます。

1つは環境エネルギー事業領域。当社はモータを高効率・高精度で回すことを100年近く続けてきました。モータやインバータで磨いてきた技術を、自然エネルギーから効率良く電気をつくり活用する装置に応用します。先ほど屋上でご覧いただいた世界最高レベルの変換効率を実現する太陽光発電用途向けのパワーコンディショナや大型風力発電用発電機の開発・販売などを通じて、グリーンエネルギーの効率活用に貢献していきます。

もう1つはロボティクスヒューマンアシスト事業領域です。これまで工場の中で働くロボットをつくってきましたが、将来的にはより人に近い分野で人と共存するロボットの実現を目指します。開発目標は3つ。まず人と共存すること。人と同じ環境で複雑な作業を行えるものをつくります。2つ目は人とのコミュニケーション。例えば人を案内できるロボットです。3つ目は人をアシストすること。搬送や移動の支援、パワーアシストを目指します。

Q ヒューマンアシスト・ロボットの可能性について教えてください。

A すでに実現している製品として、「TEM LX2」があります。これはリハビリを支援するロボットで、大学病院で活躍中です。ただしリハビリ支援や医療関連のロボットは審査も厳しく開発コストも掛かるため、拡販には至っていません。「RoboPorter (ロボポーター)」という荷物搬送支援ロボットも開発・販売しています。北九州空港での実証実験後に製品化し、実際にある会社で活用されています。

Q 二足歩行ロボットは開発していないのですか。

A 安川電機はロボットのアーム（腕）に関連する技術に強みがあります。当社のコア技術であるモータによってアームを駆使して仕事をするロボットの開発に注力しています。当社が開発した人の案内を行うロボット「SmartGuide(スマートガイド)」は自走しますが、車輪を採用しています。フラットなバリアフリー化された場所で働くことを前提としています。

Q 産業の空洞化や技術の国外流出が問題となりますが、対策を教えてください。

A 現在ロボットは、日本で開発・製造し、海外では納入先の工場でのセットアップ、カスタマイズなどを行っています。

当社は海外に必要な物は海外でつくるという基本方針です。将来、ロボットについては、設計や制御技術の開発は国内でのみ行う考えです。技術の根幹部分はしっかりと守ります。

Q 日本の自動車メーカーが海外工場をつくる場合、日本メーカーのロボットを採用するのですか。

A そうとは限りません。競争の末に決まります。なお、メーカー各社それぞれが得意とする地域があります。安川電機は日本・アジアが比較的強いです。

Q 人件費が比較的安いといわれる中国でも、自動車メーカーではロボットを用いているのですか。

A 溶接など人手による作業では品質の確保が難しい工程では、ロボットが積極的に導入されています。しかし全体的に見て自動化の比率は低いです。今後ロボット化が進展する可能性は高いと見えています。

Q 日本のロボットメーカーの優れた点と劣っている点を教えてください。

A 日本のメーカーは、ロボットを制御する技術、主要部品であるモータの技術に優れます。他方、海外メーカーは、ロボットの新しい用途の提案や市場の開拓が上手であり、この部分の強化が日本のメーカーにとっての課題ではないかと考えています。

Q 技術的に得意とするところを教えてください。

A 液晶パネル・ガラス搬送用ロボットは、畳6畳、厚さ0.2ミリメートルという非常に大きくかつ薄いガラス板を運びますが、搬送の際にガラスが大きく揺れます。その揺れを止める制振制御技術がこのロボットの肝になりますが、安川電機はその技術を得意とします。また、複数のモータを同期を取ってコントロールするためのソフトウェア技術、制御技術の開発も得意です。

自動車の溶接を行うアーク溶接^{*2}ロボットも世界的に高い評価を得ています。



懇談会の様子

Q 販売や購入後のサポートについて教えてください。

A 営業・販売に改善の余地があると考えています。関東ロボットセンタをつくったのも、その強化のためです。このセンタを通じた産業用ロボットのマーケティング活動、新用途のご提案によって、付加価値の高い製品を提供し、収益率を上げていければと考えています。

他方、アフターサービスに関しては世界一と自負しています。ロボットだけでなくインバータ、サーボモータも含め世界中のどこで使われていても26カ国のサービス拠点でしっかり対応いたします。

Q YASKAWA未来クラブについて教えてください。

A YASKAWA未来クラブは、創立90周年記念事業の一環として始めた社会貢献活動のひとつです。趣旨に賛同して自発的に入会した当社および当社のグループ会社所属の社員から、給与の一部を継続

して拠出してもらい、集まった資金を医療・福祉、青少年の健全育成、環境保護・緑化運動に役立てていただくというものです。一人ひとりから拠出される金額はささやかですが、多くの方が参加することによって大きな金額となって社会のお役に立てると考えています。金銭的な支援に加え、ボランティアも行っています。

●参加者からの感想

▶モータの製造から発展してその技術をロボットに転用して世界一になったことは経営者のみでなく、技術者がしっかりとした理念を持っていたためではないかと思います。

▶疲れもせず、飽きもせずに働き続け、“人を単調作業から解放”するロボットの存在はありがたいです。医療・介護分野で働くロボットの開発が進み利用が広がっていくことを、大いに期待しています。

▶ロボットが、人の手以上に細やかに、正確に、そして素早く動作するのを見て驚くとともに、技術の進歩を実感しました。ロボットの作業範囲が広がっていることにも感じました。

▶サーボモータ、インバータを経営の柱とし、それを元に産業用ロボットというもうひとつの主力製品を育て上げた事業発展の過程がよく理解できました。コア技術をベースとする芯のぶれない経営が、安川電機の明日をつくっているのだと思います。



●安川電機 ご担当者より●

今回は当社の施設をご見学いただきありがとうございました。ご参加いただいた皆さま方にはロボットを含め当社の事業活動を十分ご理解いただけたのではないかと思います。懇談会では一般的なロボットに関する内容から当事業内容・社会貢献の取り組みなど、幅広い視点でご意見いただき、大変貴重な経験となりました。

皆さま方からいただいたご意見を今後の当社グループの活動に生かしてまいります。今後ともよろしくお願ひします。

*2 電気の放電現象（アーク放電）を利用した溶接法。

「社会広聴会員」からの ご意見・ご感想

「第15回 生活者の“企業観”に関するアンケート」について

- 企業に対する信頼感が低下との結果は、うなずけるものです。経営トップに問題ありと考えている人が多いのではと感じています。(60代・男性・東京都)
- 東日本大震災という未曾有の災害は、生活者が企業の経営姿勢を再考するきっかけになったのではないのでしょうか。今後、企業に対する消費者の目は厳しくなると考えています。(40代・女性・北海道)
- 企業評価の際の情報発信者の信用度で「タレントなど著名人のコメントや評価」への信用度が低下傾向にあるものの、いまだかなり信用度が高い点に驚きました。(40代・女性・埼玉県)
- 購入した商品などに問題があると感じたときに取る行動として、「インターネットで製品やサービスの評判を検索・調査する」が41%で第3位という調査結果は興味深かったです。最近私も商品などに不都合があった場合は、まずはインターネットで調べるようになりました。いきなり企業に電話をしても電話もつながりにくくイライラしてしまうので。インターネットの普及は良いことだと実感します。(40代・女性・大阪府)
- 企業の情報開示はまだ不十分だと考えています。私たち生活者も、企業が発信する情報の正確さをよく見極めるべきだと思います。(50代・女性・東京都)
- 企業からの発信で不足している情報として、「不祥事や不祥事に関する情報」が最も多く挙げられていることについては、安全・安心な社会を築くためにも、企業で働く者として一層気を付けていきたいと考えています。(40代・男性・東京都)

「教育に関するアンケート」について

- 小学校に通う子どもがいます。テスト方式の授業が多

いせいか、ノートにはあまり記入がありません。私たち大人が、パソコンの普及のせいもあってか漢字が書けないようになってるので、子どもに文字をしっかりと書く習慣を身に付けさせるような教育をしてほしいと思っています。(40代・女性・神奈川県)

- 戦後、米国の教育使節団が来日し、戦前・戦中の教育に代わる教育制度・内容を真剣に考え、提案したということです。教育は国家百年の大計といわれます。くると猫の目のように変わる今日の教育行政には不信感を持ちます。(80代・男性・埼玉県)
- 学校で学ぶ内容の充実を期待する項目として「思考力・判断力・表現力を育みます」が最も多かったのが印象的でした。“ゆとり教育”を論じる際に基礎学力の低下が話題になりますが、“ゆとり教育”によって阻害された部分があるとすれば、より高度な学力部分であると思います。基礎学力の低下と“ゆとり教育”を関連付けるのはいかがなものでしょう。“ゆとり教育”についてはいまだ検証が足りないと思います。(50代・男性・静岡県)
- 学習指導要領の充実を期待する内容に関する設問とその回答結果が面白かったです。地域との連携など都市部と郊外で差が出る内容や、私立・公立の役割・期待など、深掘りしてみてもどうでしょうか。(40代・男性・神奈川県)
- 教育もグローバルな視点から改革をしていく必要があると思います。「教育に対する産業界の活動で拡充すべきこと」の回答結果もそれを反映しているように思われ、興味深かったです。企業人として世界を舞台に活躍した退職者をもっと教育現場で活用する制度やシステムを充実させるべきです。私が所属している団体でも、ボランティア活動として理科実験の出前授業をしており、大変好評を得ています。(60代・男性・埼玉県)

「企業と生活者懇談会」について

- 日本損害保険協会の記事を見て、地震保険の仕組みが分かりました。保険金の支払いが迅速になされたのは素晴らしいことだと思います。(60代・男性・京都府)
- 東日本大震災で地震保険金が約1兆2000億円も支払われたと知り、「まさかの災害」への備えに地震保険が必要と痛感しました。(70代・男性・青森県)
- 大きな震災を経験して、私も損害保険について注目することが多くなりました。(50代・女性・東京都)
- 東日本大震災の時の地震保険の対応状況がよく分かりました。6月21日までには99%の支払いを済ませたと知り安心しました。(60代・男性・静岡県)
- 損害保険について改めて考えさせられました。万一に備えていくつかの保険に加入しているものの、その契約内容について、日ごろは無関心なものですから。損害保険会社には、万一の事故の際に契約者から本当に感謝される対応をしていただければと期待しています。(50代・女性・山口県)

「未来都市モデルプロジェクト講演会」について

- 未来都市モデルプロジェクトという企画は素晴らしいと思いました。推進を期待しています。(80代・男性・東京都)
- このような取り組みが行われていることを初めて知りました。民間主導のプロジェクトということで大いに期待ができます。今後、プロジェクトの途中経過も伝えていただきたいと思います。(70代・男性・東京都)
- 東日本電信電話が檜枝岐村で展開する「“ひかり”を活用した未来型健康都市創り」に関心をもちました。講演会で星村長のお話を聞くこともでき、一度、檜枝岐村を訪れてみたいと思いました。(60代・男性・埼玉県)
- 「“ひかり”を活用した未来型健康都市創り」は素晴らしい内容でした。人口の少ない市町村にとり大いに参考になる取り組みではないかと思いました。(70代・男性・北海道)
- 西条農業革新都市の紹介がありましたが、このように未来の都市は農業を大切に作る方向で進んでほしいと思っています。(60代・女性・神奈川県)
- 農業は国の基本となる産業です。西条農業革新都市のようなプロジェクトに期待しています。(60代・女性・三重県)

「未来都市モデルプロジェクト見学会」について

- かつて公害のまちとして有名だった北九州が、環境拠点都市として生まれ変わるには関係者の大きな努力があったのではないのでしょうか。北九州市の取り組みが成功し、日本中のほかの都市にも展開されればと思います。(30代・男性・兵庫県)
- 人間、生きていくには水が必要です。ウォータープラザ北九州では水循環システムの運営・管理ノウハウを蓄積中とのことですが、培ったノウハウをパッケージ化して他国に提供できるよう、今後も努力を続けていただきたいと思います。(70代・男性・長野県)
- アジアに近い九州は多様な可能性があります。地の利を生かして、日本をけん引してほしいと思います。(60代・女性・千葉県)
- 「北九州アジア戦略・環境拠点都市」のノウハウを、アジア、特に中国に対して展開してほしいと願っています。(70代・女性・新潟県)
- 北九州市にはあまり良いイメージを抱いていませんでしたが、日本でも有数の「ものづくり」「環境」といった技術の集積都市になっていることを知りました。(60代・女性・福岡県)

道州制講演会について

- 市町村合併と道州制の違いについて述べられており、参考になりました。「市町村合併が各市町村の自主的な手続きの問題であるのに対して、道州制は国家の統治機構の問題であり国が決定すること」とは知りませんでした。(60代・女性・大阪府)
- 道州制の必要性がよく分かりました。道州制については、昇教授のご講演内容のように市町村合併との違いがもっと広く理解されるような広報があればと思います。また、経済政策、そして国民の暮らしという双方の観点から、道州制の意義が理解されるようになればと思います。(50代・女性・愛知県)
- 論旨が大変明解で、道州制の必要性をつかむことができました。日本は依存型社会から独立型へ移行し、老後も子どもに依存するのではなく、独立して人生の幕を閉じることを願っている老人が増えていると感じます。国や自治体の人々が一番古いきなりに甘んじているのではないのでしょうか。(60代・女性・長崎県)

経済広報センターは、社会広聴活動を通じて皆さまからご意見・ご質問をいただいています。



Q 経済広報センターってどのような活動をしているのですか？

A 経済広報センターは、経済界の考え方や企業活動について国内外に広く発信するとともに、内外の社会の声を経済界や企業にフィードバックし、社会と経済界の懸け橋となる活動を行っています。主な活動は以下のとおりです。

国内広報事業

◆経済界の考え方について発信する広報活動

「社会保障と税・財政の一体改革」「エネルギー・環境政策」「未来都市モデルプロジェクト」「道州制、地域活性化」など社会・経済の問題に対する経済界の考え方や取り組みを理解していただくために、パンフレットの作成、講演会・シンポジウムの開催などを行っています。



【道州制ウェブサイト】

<http://www.kkc.or.jp/dousyusei/>

【地球温暖化ウェブサイト】

<http://www.kkc.or.jp/ondanka/>

◆社会の声を聴き取って経済界にフィードバックする社会広聴活動

全国から募集した社会広聴会員の方に、生活者の代表として様々な意見をお聴きするとともに、経済界の考えや企業の姿を伝える活動を行っています。

アンケート

「企業観」「教育問題」「高齢社会」など、社会・経済問題についてのアンケート調査を行い、その結果をマスコミに発表するとともに、企業・団体にフィードバックしています。

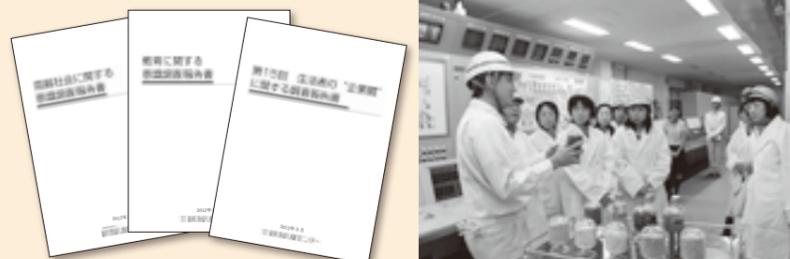
ネットワーク通信

社会広聴活動をまとめた、会員向けの機関誌『ネットワーク通信』を発行しています。

懇談会

企業と生活者が直接意見交換をする場として「企業と生活者懇談会」を全国で開催。工場見学なども行っています。

また、企業・団体が実施する「ステークホルダーミーティング」に、社会広聴会員を紹介しています。



◆教育界との交流促進と教育支援活動

教育界と連携し、次代を担う大学生や子どもたちに、産業の実態や経済のしくみ、企業活動などを理解してもらう活動を行っています。

教員の民間企業研修

全国の小・中・高校などの先生方に、夏休みを利用して企業で研修や実習をしていただき、その体験や見聞を授業や教育現場で活用していただいています。

企業人派遣講座

大学生に日本の産業の実態や、企業の社会的・国際的役割を理解していただくために、企業の協力を得て、大学に企業のトップや専門家を講師として派遣しています。

環境情報プラザ

環境問題に取り組む企業や産業界の姿や、経団連や経済広報センターの環境に関する活動を分かりやすく説明しています。



<http://kankyo.kkc.or.jp/eip/index.aspx>

産業データプラザ

小・中学生でも日本の産業について容易に理解できるように、40の産業の基礎的な統計データをアニメーションや動画、グラフなど、親しみやすく分かりやすい形で提供しています。



<http://sangyo.kkc.or.jp/idp/index.aspx>

◆企業広報活動への支援

優れた企業広報を実践している企業・個人を表彰する「企業広報賞」の実施など、企業広報を支援する活動を行っています。企業の広報担当者を対象に「企業広報講座」「企業広報講演会」などを開催するほか、企業の広報活動に関する調査、月刊誌『経済広報』やホームページで広報に関する情報提供などを行っています。

国際広報事業

日本理解を促すため日本経済や企業の実態を世界に発信しています。海外からジャーナリストや研究者、教育関係者などを招き、日本の経済界・政界のリーダーやジャーナリスト、研究者との意見交換の場や、企業人との対話の場を設けるなどの活動をしています。

また、日本と主要各国に関する最新の統計データを掲載し、世界中の日本をひと目で把握することができるような、英文国際比較統計集の発行なども行っています。



社会広聴活動 お問い合わせ先

●経済広報センター
国内広報部 社会広聴グループ
電話：03-6741-0021

●経済広報センターホームページ
<http://www.kkc.or.jp/>
●社会広聴活動のページ 入会・変更のページ
<http://www.kkc.or.jp/society/index.php>

表紙のことは

一般に高齢者とは65歳以上の方を言うのだそうですが、最近、中年期と変わらず自分ですべての家事をこなした上、暇を見つけては趣味に、旅行に、と活動的な方が目立ちます。その活力は、日ごろの節制や運動など健康維持に向けた努力のたまものには違いありません。栄養改善、空調設備や車の普及で身体への負担が減っていることも、若さに一役買っているのでしょう。

高齢期はロスタイムではありません。これから延長戦、それも前半といった様相です。健康で自立的に暮らせている間は、「終わり良ければすべて良し」の気構えでもうひと頑張りが期待される時代ようです。「隠居」「隠遁」といった言葉に憧れを抱く方には、少々酷なゲーム展開かもしれません。



小寺 隆夫(右端)

関東地方は相変わらず地震が多いです。緊急地震速報にも驚かなくなつてしまいました。先日など、あの忌まわしいチャイムを鳴らし続ける携帯電話を手に、やってきたエレベーターになんの躊躇もなく乗り込み、「震源地は千葉県沖で、震度4みたいですね」と乗り合わせた人と会話を交わす始末。みんなのための速報か……。

塩澤 聡(左端)

飛行機が着陸する際にタイヤが滑走路に接触した衝撃が大きいと、スムーズに着陸出来ない下手なパイロットだな~と思っていました。実は、滑走路が雪や雨で濡れているときは、あえて機体を「ドスン!」と垂直に落とすように着陸して滑りにくくしているのだそうですね。そんなことは露知らず失礼しました。

森田 真樹子(右から2番目)

現在、バジルの栽培に挑戦中です。初心者でも比較的育てやすい植物だそうですが、なかなか思うようにはいかず悪戦苦闘……。それでも元気に育つバジルの生命力には、ちょっとした感動を覚えます。収穫を待ちわびながら、素人栽培の悪環境(?)に負けずに成長するバジルの力強さを見習わなければ、と思う毎日です。

長尾 ひとみ(中央右)

夏ごろ、ねんきん定期便が届きました。ねんきんネットでいつでも最新の年金記録が確認できるそうです。思わず自分がこのまま働いていたらどのくらい年金がもらえるのかチェックしてしまいました。こうやって定期便が送られてくること、働いてお金をもらえることは有難いことだなあとしみじみと思ったのでした。

高橋 美香(左から2番目)

物置を片付けていたら、小さいときに読んだ絵本が何冊も出てきました。ほごりをかぶり古くなってはいましたが、絵や内容は、今読んでも素晴らしいと感じるものばかり。読書の秋、素敵な絵本を与えてくれた親に感謝しつつ、昔を思い出しながら本の世界に入りたいと思います。

佐藤 亜矢子(中央左)

「きれいな花を咲かせるのよ」と、頂いたサボテン。5年も経過しているのにいまだ開花せず。と、あきらめていた矢先のある夜、真っ白い花がキラキラと輝いているではありませんか。月夜も手伝ってとても神秘的です。秋の夜長を楽しむにはちょっと早いタイミングの開花でしたが、心に潤いを感じるひとときでした。

社会広聴活動レポート

ネットワーク通信

2012 No.52 秋号



ネットワーク通信は再生紙を使用しております。

発行 / 一般財団法人 経済広報センター
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 経団連会館19階
TEL:03-6741-0021 FAX:03-6741-0022

発行日 / 2012年9月26日

<http://www.kkc.or.jp/>